

開会挨拶 済生会理事長 炭谷茂氏

今日は休みの日、また外を見ますと非常に雨が降ってお足の悪いところ、こんなにたくさんの方にお集まりいただきまして、本当に厚く御礼申し上げます。

私ども済生会は明治44年に創立されました。今年が104年という歴史を経ております。なぜ済生会が明治44年につくられたか。明治天皇によってつくられたわけですが、当時、医療や福祉サービスに恵まれない困窮者がいらっしやった。これに対して医療サービス、福祉サービスを提供しなければいけないという趣旨で、われわれ済生会が発足したわけです。

この根本的な精神は、今日でもわれわれ済生会の病院、または福祉施設に受け継がれています。この新潟県におきましても、新潟第二病院、三条病院をはじめ、いろいろな福祉施設でこの精神を根本にして仕事をしています。その精神をさらに明確に発揮するために、平成22年度から「なでしこプラン」と称しまして、生活困窮者に対して医療や福祉などのサービスを展開するというのを全国的に行っているわけです。

このような試みは、日本の社会政策の中でも比較的珍しいのではないかと思います。着実に成果が上がっていると自負いたしております。たとえばホームレスに対する支援、刑務所からの出所者への支援、障害者への支援、元ハンセン病患者の方々への支援など、さまざまな分野にまたがっています。

明治44年当時の生活困窮者の状況と今日の状況は大変異なっています。戦後だけを取りましても、日本の社会の歴史を振り返ってみますと、戦後の昭和20年代、30年代、日本全体が貧しかった。すべての人が生活困窮に悩んでいた。次に、昭和40年代、50年代の高度成長になった、日本人はすべて中流社会になり、中流階級に属してきたという時代の生活困窮者問題はまた変化していきます。これが第2段階ではないかと思います。

しかし、いまわれわれは第3段階に入っているのではないかと思います。日本人は、かつては9割以上の方が中流社会と思われた時代から、今日、10年前ぐらいと考えたほうがよろしいでしょうか、10年ほど前から日本の社会の中に所得格差が表れ、地域社会や企業のつながり、家族・親族の絆がだんだん薄くなってきて、戦後第3段階目の生活困窮者問題がいま生じている。それに対して、どのように対処すべきか、まだその手法というものが開発されていない。平成22年度から「なでしこプラン」を実施していますが、その中でも試行錯誤の部分があります。そこで、今回のシンポジウムは第4回となっております。

が、皆さんと一緒に、どのようにして第3段階目の生活困窮者問題に対処したらいいのだろうかということを考えるようにしたわけです。

この問題は日本全体の問題でもあります。地域によってずいぶん差があります。新潟の問題と東京の問題は大きく異なります。また、私は隣の富山県の出身ですが、富山県と新潟県は意外に違います。それぞれの県、場合によってはそれぞれの市町村ごとにも異なるかもしれません。ですから、このようなシンポジウムでそれぞれの県において考えてみる。その地域においてどんな生活困窮者問題があるのか、どのような対策を講じたらいいのかということで、各地でこのようなシンポジウムを開かせていただいているわけです。

本日は幸い、新潟大学の高橋先生などこの地域で実践活動や研究をされている方々のご参加をいただいたことは大変ありがたいと思っております。きっと実り多いものができるだろうと思います。このシンポジウムを開くにあたりまして、事務局としていろいろとご苦労いただきました新潟県済生会支部の方々をはじめ、関係者の方々に厚く御礼を申し上げますと共に、本日のシンポジウムが今日参加されている方々に対して実り多いものになるよう期待いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。